

幼児教育における「遊び」

—「遊び」の問い直し—



山根 祥雄

はじめに

現在の日本の教育は、能力主義、学歴主義の風潮のなかで、歪曲^{わい}され、矮小^{わい}にされている。幼児教育はまさにその渦中にある。最近の諸科学文化の発展と、教育技術・機器の開発のつとって能力開発、早期開発と、ひたすら幼児の才能開発のアピールに余念のない人も少なくない。また子どもの将来、具体的には進学・就職・結婚などという側面から、しゃにむに幼児には不合理なおしつけ教育をねがう親も多い。確かに早期能力開発論は、その可能性と有効性に一定の論拠もうかがえる。またわが子の将来に期待する親の教育要求も一面正当な要求と受けとれぬでもない。しかしながら指摘されねばならないことは、過

度な早期開発、一面的な才能開発、あるいは近視眼的な親の教育のねがいが、子どもの成長上にとりかえしのつかないゆがみを生むことである。さらにそれは、現実には、子どもたちのなかに、いつそうの選別と分裂を生みだすだけである。

このことを別の角度から表現すれば、両者ともに、学習はのぞまれるものであり、逆に遊びは排除すべきものである、とする考え方がその論拠となっている。あるいは、幼児の遊びを不当に扱うか、余分なものとして位置づけているにすぎない。

このような幼児教育界の現状において、いま一度幼児の遊びを問い直すことは、幼児教育にたずさわるものにとって、きわめて大切なことである。それは、いわば幼児の遊びの復権のための方途をさぐることである。いうならば、幼児の遊びをとり

もどし、育成する教育は、幼児教育のゆがみやひずみを是正する教育に通じていると考えられるのである。

そこで、本稿では幼児の遊びの現代的意義とその教育的意味を、次のような手順で吟味していきたいと思う。まず第一に、幼児の遊びをとりまいてる現代的な諸相を洗い出してみる。現在の幼児の遊びの周辺を、いくつか特徴づけをはかりながら、幼児の遊びがゆがめられ、さらされている問題点を考えてみたい。

第二に、従来多くの遊び論がたたかわされてきた。それらの遊び論には遊びを考える論点はほぼもうらされている。これらの遊び論を、その論旨によって分類し、それぞれの問題点に考察を加えてみる。あわせてそれらの見落とした部分に、補充的な視点を提示してみたい。

第三として、第一、第二をふまえて、現在における幼児の遊びの意義を考察してみる。そして最後に、遊びを育てるための方策を若干提示してみたいと思う。

一、幼児の「遊び」の周辺

幼児の「遊び」を考えていくにあたって、まず最初に、幼児の遊びをとりまいてる現代的諸相をみておきたい。激しい社会変動のなかで、幼児の遊びがどのような変質を迫られている

か。現実とは現実として、ひとまず分析的に、また冷厳に直視してみたいわけである。

ここではとりあえず、①核家族化、②都市化、③情報化（マスコミ化）、④知育偏重化、⑤遊び場と遊具の画一化、の五つの観点からこの問題に接近してみたい。

① 核家族化

現在、夫婦と未婚の子女からなりたっている、いわゆる核家族は、日本の全世帯のうち約七割強を占めるといわれている。

直系家族から核家族への移行は、戦後の民法改正により「家」制度が否定されたところに、その端緒をもとめることができる。だが本格的に核家族化が進行するのは、昭和三十年代以降の高度経済成長期に入ってからである。つまり、家庭電化、生活の洋風化、消費性向の高まりなどの、各種の生活様式の変化をテコとして核家族化は進行している。（松原治郎「核家族時代」NHKブックス）したがって、核家族化は、きわめて現代的な、社会変動の一側面といえるだろう。

この核家族化と併行して、平均世帯員数の減少傾向が注目されねばならない。現在、日本の平均世帯員数は約四人（昭和三十年以前では五人）といわれる。このことは、一世帯内における子どもの人数の減少傾向として、注目しなければならない。

家族のなかで、子ども二人が今や普通となってきている。三人も子どもがいれば、大世帯の部類に入るのが、昨今の実状だ。

さて、このような核家族化、家族の小規模化のすすむなかで、幼児の遊びはどのような影響をこうむっているか。

第一に、集団的な遊びがきわめて困難になってきた。兄弟姉妹間での、役割分化にもとづく集団による遊びができにくくなっている。昔は「兄弟げんか」という言葉に象徴されるように、一つの遊具をめぐる、またある役割をめぐる、小社会での葛藤があり、闘争があり、そして協力がみられた。そのなかで、幼児は自己を発現し、人間として逞しく育っていく。遊びが幼児の生活そのものであるといわれるとき、その遊びが幼児の生命の燃焼活動である、と考えるとよい。だが、その燃焼活動は、集団化され、社会的ルートにのせられたとき、より生き生きと働くはずである。昨今では「兄弟げんか」という言葉はあまり聞かれなくなった。というよりも、けんかすべき相手がそもそもいないに等しいのである。遊びの集団化が困難になってきた。これが、核家族化、家族の小規模化のなかで生じた、第一の変化である。

第二に、このように、家族の中で、幼児の人数が少ないということは、それだけ親（とりわけ母親）の、幼児の世話や保護がゆき届くということを意味している。したがって、それだけ

過保護になりやすい。幼児の欲求の先取りをし、身近で、安全な遊びが母親の意向を中心として選ばれる。幼児は、与えられた遊びに終始し、遊びから創造と冒険とが欠落していく。遊びが受動的になり、能動的なとり組みが弱まってくるとき、それは単なる時間つぶしでしかなくなってくる。

第三に、遊びから集団性が欠如し、受動的な与えられる遊びに変わるということは、それだけ、商品化された遊び、遊具への迫近を意味している。両親同伴による、遊戯場での遊びの氾濫。そして大人も目をみはる精巧な完成品としてのオモチャ。ほとんどが、親の助力で作りあげるプラモデル。遊びも使い捨ての消費時代の影響をもちに受けている。核家族化、家族の小規模化は、商品経済の有効な戦略基地でもある。

② 都市化

核家族化とならんで、現代の社会変動の一面を表現している言葉に「都市化」がある。「都市化」がもたらす大きな影響の一つとして、地域共同体の崩壊、ないしは地域意識の後退があげられる。「向う三軒両どなり」式の牧歌的な地域感情から「となりは何をする人ぞ」式の冷たい隣人意識への推移は、農村が都市化し、都市が肥大になるにつれて、ますます強まってきた。

こうしたなかで、幼児を中心とした遊び仲間、徒党集団、同輩集団といったものが、地域から次第に姿を消した。もともとこのことは先に述べた核家族化、家族の小規模化とも密接な関連がある。昔の親はあまりにも忙しすぎた。多くの子どもをかかえて、それほど細かい世話はみれなかった。そこから、必然的に、幼児達は近所の仲間も一緒にあって、それこそ徒党をくんで、遊ばざるをえなかった。しかし今はちがう。親は幼児といつも生活をともにしている。しかも近所とはそれほどつき合いはない。両方の条件が相まって、幼児の遊びを中心とする同輩集団の形成は、著しく困難になってきているのである。

さらに、都市は、大人の生活機能を中心に合理的につくられる。幼児の遊びにとって最もかっこうの場所である「原っぱ」「ガラクタの山」は一掃される。かわりに、整然と秩序だった「遊び場」「公園」がつくられるが、それとて現状では十分とはいえない。

また都市においては、「交通戦争」という言葉に象徴されるように、安全性への保障を全く欠いている。家から一步外へ出れば、遊びどころか「身の安全」がおびやかされる。

都市化は、遊びの、いわば人的条件と空間的条件との両方をうばいつつあるのである。

③ 情報化（マスコミ化）

現代の社会は、情報化社会であるといわれる。これには、非常に広範で深い意味がこめられているが、ここではそのうち、マスコミとくにテレビの問題を考えてみよう。

テレビが幼児の生活に、かなり密着してあることは、もはや言をまたない。ブラウン管いっぱいとうつる「怪物」に目を輝かし、それを打ち倒す正義の味方、仮面ライダー、シルバー仮面……に拍手を送る。

このように、テレビ映像に日夜さらされるなかで、遊びがどのように変わってきたか。それは「する」遊びから「見る」遊びへの変化であり、「創造」としての遊びから「模倣」ないし「受身」としての遊びへの変化である。

商品としての「遊具」がこれに拍車をかける。テレビ映像と「遊具」がタイアップして、これでもか、これでもかと、画一的、商業的遊びを幼児におしつける。「つくり出す」、「表現する」遊びがいつのまにか、「与えられる」、「使い捨てる」遊びへと変わっていく。

④ 知育偏重化

幼児の「遊び」の問題は、現代教育の支配的な傾向としての「知育偏重」主義とも関連させてみておく必要がある。

きわめて早い時期から、知的教育を施しておきたいという願望が、昨今の親たちの間で支配的になってきた。それは学歴社会に対応する受験制度が厳然とゆく手をはばんでいるからである。また保育所や幼稚園などで早期の知的教育を施す傾向にあるのも、その原因の一端といえよう。教育は、それ自体問題はない。幼いころから知的好奇心を喚起する訓練を行なうことに、むしろ異論はない。ただ、その知育が偏重であるところに問題を指摘せねばならない。では「偏重」とはどういう現象をさしているのだろうか。

第一に、それは知育なるものの内容なり、方法なりに焦点をあてて、そこに問題状況を見いだすとき、「偏重」とよばれる。つまり、教の概念やことばなどを、具体的な生活場面や経験を捨象したところで、とにかく上から注入していく方法をとるところに、現状での知育の問題点がある。

第二に、幼児の自発的な遊びの時間に比して、右のような知育に費やされる時間が多すぎるとき、「偏重」とよばれる。第一と第二は密接に関連していて、注入主義の知的教育を行なおうとすればそれだけ、遊びの時間は制限される。

このような偏重教育は、ある種の賞罰を強化しながら行なわれることが多いから、幼児の生活態度は、いつの間にか受動的になりやすい。自発的に遊び、能動的な創造へのとりくみ、驚

きと感動が失なわれるとき、幼児は本来の姿を次第に失っていく。

⑤「遊び場」と「遊具」の画一化

最後に、これまで述べてきたこととすべて関連をもっているが、「遊び場」や「遊具」の画一化をあげねばならない。どこかの公園をのぞいても、ブランコとジャングルジム、すべり台、シーソー。どのオモチャをとってみても、プラモデルや怪獣のモデル。商品化され、画一化された遊具がちまたにあふれている。都市のなかで自然の遊び場が失われれば失われるほど、既製の安易な大人による遊び場が乱造されずにはいない(それとて現状では決して多くは存在していないが)。核家族化とマスコミ化とが相まって、商品化された遊具がはばをきかして幼児を支配する。

以上述べてきたことは、現状での幼児の遊びをとりまく、いわばマイナスの側面であり、幼児の「遊び」は決して楽観の許されないところにかけているといえよう。

しかし、こうしたマイナスの状況にありながらも、幼児は自分たちの遊びをみつけ、創り出し、自己の生活と密着させている。そのことに、昔も今も変わりはないはずだ。とすれば、大人の目から早急に、幼児の遊びをとりまく現実を絶望的だとき

めつけて、悲観ばかりもしておられない。状況が問題化しているからこそ、現代社会が過渡的であるからこそ、かえって本格的に幼児の遊びを考え直してみる必要があるといえよう。

二、「遊び論」の検討

現在の幼児教育における遊びの意味と意義を考察する前に、あらかじめ従来の「遊び論」を吟味しておく必要があるように思う。

遊びを、いわば人間の本質的自然的な活動とみなしてきたのが、従来の遊び論に共通する一つの特徴であった。また幼児の遊びを、人間形成にとって必要不可欠の活動としてとらえていることも、第二の特徴として注目すべきことである。

だが、こうした共通点をもちながら、従来の遊び論に微妙な論旨のズレ、ないしはニュアンスの差異がみられる。その差異に着目して、若干の類型化を試みると、次の三つに大別できよう。つまり、まず第一は、遊びをレクリエーション活動ととらえるものである。ここでは遊びは再生産的あるいは非直接的な学習活動であり、「たのしみ」を伴う感覚的活動ととらえられる。第二の類型は、遊びを主体的創造的な活動であり、とりわけ自由で、しかもルールの伴なう、ある程度現実とは一線を画する人間活動であるとするもの。第三の類型では、遊びを教育

的活動あるいは学習活動といいかえてもよいくらいのものである。遊びは外界へ働きかける能動的・目的的な学習活動のことである。

以下、この三類型の遊び論をふりかえりながら、遊び論を深めていきたい。

まず第一の類型、レクリエーション活動としての遊びについて。

ここでは遊びはストレイトに学習活動ではないけれども、「たのしみ」を伴う再生産的活動であり、感覚的な活動がその中核となる。端的にいえば、スポーツといいかえてもよいくらいのものである。この類型に属する論者としては、プラトン、コムニス、ロック、ルソー、ペスタロッチー、オウエンなどをあげることができるだろう。

たとえばプラトンは『国家篇』のなかで、祭り、遊び、歌、それに娯楽などだけで子どもを育てている。楽しむことを十分に教えることができれば、それで教育のすべてをなしたとたかのようにもうけとれる。その後近代に入って、コムニスは『大教授学』のなかで遊びの意義を限定し、遊びの要素を学習に導入することに成功した。つまり、遊びを課業(学習作業)に対して、休息・休憩と考え、教育技術の側面から、「遊び楽しむながら」の学習を重視している。

このコメニウスの考え方の延長線上にロックがある。ロックによれば、「……遊戯気分は……子どもの元気を保ち、体力と健康を増進するためには、むしろすすめられるべきものです。そして主な腕のふるいどころは、子どもたちがしなくてはならぬことを全部スポーツ化し、遊戯化することです」(岩波文庫版

部訳『教育に関する考察』七五、六ページ)こうしてロックは小さいころ

(二種の遊具)などの使用によって、遊びながらアルファベットや発音を学ばせるのである。かれは遊びの自由の要素を学習活動に導入しているのである。

さて、幼児の遊びはそのほとんどが身体活動を通してなされるものであり、体育へと発展していく要素を内包していることはいうまでもない。

ルソーは、幼年期において、精神の早期教育のみせかけの進歩に反して、身体を進歩を強調している。「遊びとは、つまり自然が子どもたちにもとめる運動の楽なまた自発的な方向であり、子どもの楽しみごとに変化を与えて、それをいっそう楽しいものとする技術であって、たとえどんなにわずかな強制であっても、それによって楽しみごとを労働に変えてはならないのである」(明治図書長尾他訳『エミール』第一卷二三四ページ)とはいえ、幼児期に強調される遊びも、子どもの知性の発達につれて、仕事と区分されるようになり、子どもは遊びを仕事の息抜きとみ

なし、学習に専念するようになるのである。

ルソーについて、ペスタロッチが幼児の遊びを健康増進のうえから体育にとって重要であると位置づけていることは注目される。またオウエンの幼児学校には、運動場と遊戯室が設けられていた。ここで幼児は仲よく遊び、学習と遊戯とのバランスが考慮されていた。

以上、第一の類型の遊びの特色論は、簡単にいって次の点にしばられる。まず、子どもの遊びを「無心の楽しさを伴うもの」そして、それ自体、価値的・積極的にとらえる。次にこうした遊びを学習場面と対置させ、両者の共存をはかり健康を増進させながら、楽しみながら、学習場面が生かされていく。やや強い言い方をすれば遊びは学習場面の従属変数である。遊びの過程そのものにおける子どもの外界へのかかり方や、その教育的意義についての論及はここではみられない。

遊び論の第二の類型は、遊びを主体的に自由な、しかも創造的な活動である、とする。

この遊び論が第一の類型と異なるのは、遊びを知的・精神的な活動ととらえ、間接的な知的学習活動とみなしている点である。つまり、遊びは総じて、(現実とは切りはなされた生活)での自由な主体的活動であるが、厳しいルールがしかれる。遊びを通して、子どもは大人の世界を学んでいくのであり、他方

直接的には子ども集団のなかで自己実現をはたしていく活動なのである。しかしながら後に述べるように、第三の類型のような直接的な学習の習慣づけをはかるのではなく、あくまで子どもを主体的で自由な活動を尊重するものである。

第二の類型の遊び論者の代表は、ホイジンガならびにカイヨワである。

ホイジンガはかれの著『ホモ・ルーデンス—人類文化と遊戯—』のなかで、遊びというものを子どものそれに限定せず、緊張や喜びやおもしろさを伴う人間の最も素朴な形式の行動ととらえた。かれによれば、遊戯の形式的な特徴として、自由、日常生活から活動領域への一時的なふみはずし、さらに完結性と限定性をあげた。そして遊びは特殊的な世界であって、(本気でそうしている)のではないもの、日常生活の外にある、と感じられているものである。とはいえ、遊びは人間の心の奥深い層に根本がおかれており、遊ぶものを心の底までとらえてしまうことも可能な一つの自由な活動なのである。しかも人間にとって遊びは文化を創造する根源的な活動なのである。そして子どもの遊びは本質的なあり方から、遊びの形式的特徴をすべておびており、純粋な形にあらわされた遊びなのである。

以上のようなホイジンガの遊び論を批判的に検討を加えたのがカイヨワである。かれは著書『遊びと人間』のなかで、遊び

の定義として、(1)自由な活動、(2)分離した活動、(3)不確定の活動、(4)非生産的な活動、(5)ルールのある活動、(6)虚構的活動、以上の六つをあげている。また、競争、偶然、模擬、眩暈の四つの役割から、遊びを考察している。教育の面からいえば、カイヨワにとって、遊びの目的は、現実生活から切り離された自由で自主的な遊びそのものにあるのであるから、練習、試練、試演は遊びの付随効果なのである。そして遊びの教育的意義として重要なのは、遊びのルールを尊重することにあるのである。第二の類型の遊び論はかくして、子どもの遊びを現実生活とはかけはなれているけれども、子どもの自主的で自由な文化的社会的創造的活動であるにとらえている。この点が、第一の類型よりも、より前進的といえるだろう。しかしこの論には、遊びによる幼児の人間形成ないし発達、つまり、遊びのなかでの学習の視点が背後に後退していることは指摘されなければならぬ。

最後に、第三の類型は幼児の遊びがすぐれて外界に対する活動であるにとらえられるものである。

この第三の類型は特徴上ほぼ二つに大別できる。その一つはまず、幼児の遊びの創造性を重視する。また子どもの生活習慣づけないし人間形成にとつての遊びの意義から、遊びを教育的活動とみなすものである。もう一つは、心理学的な立場から幼

児の遊びを幼児の発達の重要なモメントとするものである。

まず、前者について。幼児期における遊びを、教育上意義づけたのは、やはりフレーベルであるといつてよい。かれは子どもの生活や動作なかんなく遊びのなかに幼児の独立した生活領域をみた。子どもの創造性への着目によるかれの思想の到達点は「恩物」であつた。フレーベルは主著『人間の教育』において遊びを幼児期の人間の発達の最高段階、あるいはこの段階の人間の最も純粋な精神的所産とみなした。また同時に、遊びというものを人間の生命全体およびすべての事物の裏に潜むところの内的なものや、秘められた自然の生命の原型および模写ともみなしたのである。子どもの遊びは、未来の全生活の子葉であり、生命力や生気の純粋な出現であり、またそうあるべきものである。フレーベルは子どもの遊戯を、特徴的な性質の上から、次の三種に分類した。つまり、生命および実生活の模倣、学習したものの応用、および精神的な自発的な表現の三つである。またかれは、子どもの遊びを機能の上から、身体的遊び、感覺的遊び、知的遊びの三種に分類した。

このフレーベルの考えを批判的に、より発展させた人にデュイがいる。かれは、子どもの能動的な学習を重んじ、生活のなかで学習するという意味から、作業を教育にとりこんだのである。デュイは著書の『学校と社会』のなかで、フレーベル

の案出した恩物、遊戯、作業などが、本当に子どものものとなつていくかどうか、あるいは子どもをより高い水準の意識と活動へと引きあげるような衝動を与えるものであるかどうか、とするべく問いかけている。かれは恩物、遊戯または作業の既成の組合わせに従う必要からの解放をとらえた。

一方ソ連のマカレンコは幼児の遊びと外界との関係を、教育的な視点から最も先鋭にとらえた人の一人だ。かれは遊びが子どもにとって外界を認識していくための重要な手段であり、外界に対する子どものかかわり合いの表現であるという。

「子どもがどんなふう遊ぶかが、その子が大きくなつてからどんなふう働くかを多くの点で示す。……いい遊びはみな何よりも働く努力と思考の努力があります。努力のない遊び、積極的な活動のない遊びは常にわるい遊びです」(明治図書版マカレンコ全集第五巻「子どもの教育について」三三六ページ)そして遊びの正しい指導とは、遊びの選択と援助なのである。かれは、子どもの成長・発達にみあつた理想的な遊びの改良をめざしたのであり、見通しをもつて遊びの習慣を労働の分野にひき入れたのである。

ソ連の幼児教育の特質は、子どもの遊びと労働との結合にある。ここではリュブリンスカヤとチャーエフとをあげておく。まずリュブリンスカヤによると、「遊び——これは子どもの独

自的な活動であって、子どもはそれによって自分のまわりの生活、とりわけおとなの对象的行為、労働、会話、相互関係を積極的に反映する」(明治図書藤井訳『幼児の発達と教育』一〇〇ページ)のである。自分をとりまく物体を対象としたさまざまな行為

〔「对象的行為」——物体遊び〕を遂行しながら、幼児は色、音、におい、触覚などの結合を学ぶ。遊びは自由に、したがって自発的に遊ぶことに、まわりの世界へ自ら積極的に働きかけることに意味がある。また、ネチャーエフは、子どもの遊びと労働との相異を峻別しながら、相互の結合をはかっている。(明治図書、藤井訳『幼児の労働教育』参照)

さらに、日本の幼児教育研究家は、特徴的にいえば、たとえば柴谷のように、幼児の遊びの保育の不徹底さを指摘しながら、いわば「人生の読解力」を身につける幼児の遊びを力説している。現在のツメコミ教育に骨抜きにされている現代の教育状況を憂え、人間の形成という教育哲学の立場から、幼児と遊びを育てようとする論調である。(柴谷久雄『遊びによる人間形成——保育の哲学』黎明書房一九七三年他参照)

以上は、第三の類型のうちでも、幼児の遊びを目的・能動的に外界へ働きかける幼児教育の重要な機能ととらえる遊び論であった。次に、同じく子どもの遊びの能動性に着目しながら、前者とちがって、心理学の立場から遊びを幼児の発達の不可欠

な要素として位置づけている遊び論のうち、ヴィゴツキーとピアジェの二例をあげたいと思う。

まず、ヴィゴツキーは、遊びを子どもの日常生活の原理ではないとしながら、遊びは発達における主導的な役割を有する、という。遊びの本質を、子どもの願望の想像的・幻想的実現ととらえ、子どもは遊びにおいて一つの虚構的な場面を創造するが、これをかれは子どもの抽象的思考の発達とみるのである。

(藤本他訳「子どもの精神発達における遊びとその役割」『国民教育』一九七二、夏季号)次にジャン・ピアジェは、児童の知能発達の側面から、児童の遊びを、感覚運動的活動から操作的な思考への象徴の形成の発達ととらえている。かれは子どもにとって、遊びのうちでも、虚構的な遊びとルールの遊びとが対立するものであること、さらに、子どものモラル形成にとって、遊びのルールを尊重すること、などの大切さを力説したのであった。(黎明書房、大伴訳『遊びの心理学』参照)

第三の類型は、のべてきたように、幼児の遊びにおける外界への働きかけを中枢として、幼児の遊びを幼児の学習・発達ととらえたのである。けれどもこれは、幼児の遊びの学習の側面に焦点づけたために、主体的目的な無心の遊びをわすれてしまっている。さきに幼児の遊びの周辺のところでは指摘したような状況のなかで、一見むだな遊びは非常な意味をもっているの

である。さらに第三の類型の問題点として指摘できるのは、仕事(労働)——学習——遊びの三者が相互に分極的・固定的にとらえられてしまっていることである。

ここで従来の三類型の「遊び論」のまとめを簡単にしておきたい。

まず第一の類型は、遊びをほぼレクリエーションにとらえている。これは遊びと仕事・学習とをいわば対立してとらえる形になってしまっている。遊びと学習・仕事とを同時的併行的に消化している、子どもの現実の生活がわすれられている。第二の類型は、幼児の遊びを文化的精神的な創造の根源となる自由な活動にとらえている。しかし、学習や教育の視点は弱い。第三の類型では、幼児の遊びを外界への働きとみなし、すぐれて学習・教育と結合させている。しかしながら、教育・学習・発達の側面を強調のあまり、幼児の遊びの自由で、創造的な無目的な活動性を欠落させてしまっている。あるいは遊びそのものの広範な領域の想像性を限定してしまう感がある。

こうして、従来の遊び論のもれおちた視点をとりあえずおきなおす必要がある。補充すべき視点として、二点提示したい。

まず、第一点。第一、第三類型にみられたように、仕事(労働)・学習・遊びの三者が相互に対立的なものとして固定され

てしまっている。これは、学習は望ましいものであるが、遊びはそうではないとする現在の遊びに対する支配的な考え方と一脈通じている。幼年期の遊びは広義に解釈すれば、幼児の生活のほとんどであるといってもよいくらいであることも考え合わせれば、学習・仕事・遊びというような対立的な握は正当ではない。この考え方をおしすすめると、子どもの生活が破壊されることも十分予想できる。こうした遊びを仕事・学習と対立的にとらえる考え方を克服するためには、幼児の生活における遊びの独自の領域を再確認する必要がある。換言すれば、幼児にとって固有で基本的な生活領域としての遊びを再発見するということである。

第二の視点。三つの類型を補足すべきものとして考えられるのは、遊びのもつ学習・教育的視点そのものを再度とらえかえすことである。これは、第三の類型のように、遊びを即時的に学習・教育・発達のためのものとしてとらえるのではなく、幼児の遊びそのものをあくまで尊重しながら、幼児の遊びの教育的意義を再検討することである。端的にいえば、従来のように遊びによって教育することではない。遊びを教育する視点である。幼児に遊びを教育する、という方針がないかぎり、子ども遊びは、学習や労働(仕事)の従属変数にとどまる。能力主義のうずまく現在にあって、幼児の遊びを教育するという視

点への転換こそが、幼児をとりまく人びとに切に期待される。

三、現在における遊びの意義

子どもの遊びをとりまく周辺、および従来の遊び論の検討をふまえ、最後に、現在における幼児の遊びの意義を分析してみたい。

幼児教育にとって遊びの意義はどのようなものであろうか。ここでは以下の三点に特徴づけてのべていきたい。

まず第一に幼児の遊びとは、子どもの内的必然的な自己活動であり、かけがえない幼児の生活であることを了解せねばならない。幼児にとって遊びは、他のあらゆる生活領域と不可欠で、基本的な領域であり、他のものよりも、はるかに主体的な活動領域なのである。またそれは時間と場所を選ばない無条件無限定的無意図的な活動である。さらに生き生きと想像と空想に富む活動である。それは健康、社会、自然、言語、音楽リズム、それに絵画製作のいわゆる六領域、つまり幼児教育場面すべてに深くかかわるものである。幼児の遊びとは幼児の生命の燃焼活動なのであり、幼児が自ら構成する生活であり、幼児が自分の存在をかけての、全人格的な生活のいとなみをいうのである。

第二に、幼児にとって遊びとは学習にほかならない。この学

習とは知的、身体的、精神的それに社会的なあらゆる分野と領域にわたる、子どもの「生きる」ことに対する学習なのである。知識、言語、数、色、社会性、生活習慣それに芸術、健康など、子どもの学習課題のいずれをとってみても、課題に対するこれら自身の活動にもとづく学習がなかんずく尊重されねばならない。子どもの動機づけなり、刺激が大切であるといわれる理由がそこにある。むりじいや、おしつけや注入は、幼児の間形成にとりかえしのつかない汚点を残すことになるのである。第三類型の遊び論では教育の役割を強調しすぎて、方向性がわからない。遊びの重大さは、まさに人生を生きぬく、基礎的な力となって幼児の身につくところにある。幼児の自由で自主的な遊びこそが、人生に対する創造的な活動の源泉を養うのであり、こうした失敗をおそれない、冒険と探求と好奇心にみちた遊びを組織し、くりかえし、つみかさねることによって子どもは本当に一歩ずつ成長していくといえるのである。このようなことをぬきにしては、子どもの遊びを育てる観点は出てこない。

幼児の遊びの意義の最後に特徴づけられるのは、幼児にとって遊びはコミュニケーション活動である、といえることである。これは第一、第二の意義を別の側面からみつめたことになるだろう。

幼児は遊びを通して、他人に自己を表現したり、他人の表現を受けとり、読みとったりしながら、その過程において、かれらは成長するのである。この遊びを媒介とするコミュニケーション過程が子どもの学習そのものなのである。幼児にとって遊びはいつわらぬ自己表現であるからである。つまり、自他の表現活動のなかに失敗、反省、おどろき、感動、共鳴、新しい発見、反発などをくりかえし体験しながら、幼児は新しい生活をきりひらいていくのである。この意味で、幼児の遊びはかれらの生活にとって不可欠なコミュニケーション手段なのである。

現在の幼児の遊びの教育的意義を特徴づける視点を三つ提示した。そこで幼児の遊びを育てる方策を、三点提案して本稿を終えたいと思う。

まず第一点は、幼児の遊びの集団化である。幼児の遊びの集団化が重要であるとするのは、次の点においてである。つまり①幼児の遊びの掘り起こし、組織化、育成、②幼児の仲間づくり、③幼児の人間形成、以上の三点である。

第二点は、遊具やおモチャ（玩具）を幼児に与える場合の注文である。最近の遊具、おもちゃといえば、商品化され、画一的で、すでに完成されたものが販売されている。そこで、子どもに与える遊具などは、是非とも、未完成のもの、過美でないものにしてほしい。できればガラクタを与えてほしい。幼児は

それらを駆使して、自由に新しい造形に取組むであろう。あるいは遊具がなくとも、じりや砂、それに自然の事物一切が子どもの遊びのなかで生かされるのである。幼稚園や保育所でも、ガラクタの利用をまず考えていただきたい。子どもの遊びを構成する試行錯誤のいとなみが、なによりも幼児のかけがえのない遊びの生活なのである。

最後に第三には、幼児の周囲にいる人たち、とくに保母さんや母親の方がたに対する注文である。それは内容の濃い創造的な幼児の遊びをはぐくむという、かなり長期的な配慮である。それは気ままに放逸な幼児の遊びを放任することではない。また一定のモデルの遊びを子どもにおしつけることでもない。子どもが乳児、幼児、少年へと成長するとともに、かれらの成長にみあった遊びの設定の配慮をのぞみたい。そういう配慮は、さきの二つの提案とも関連しているのであって、遊び、遊びの集団、遊び場、遊具などの確保と、その充実への配慮にはかならない。

（前・広島大学）